

- Phys., 2 (1973), p. 43
- 31) J. A. FOX and D. N. BARR: Appl. Phys. Lett., 22 (1973), p. 594
 - 32) J. D. O'KEEFE and C. H. SKEEN: J. Appl. Phys., 44 (1973), p. 4622
 - 33) J. E. LOWDER and L. C. PETTINGILL: Appl. Phys. Lett., 24 (1974), p. 204
 - 34) J. A. FOX: Appl. Phys. Lett., 24 (1974), p. 461
 - 35) L. C. YANG: J. Appl. Phys., 45 (1974), p. 2601
 - 36) B. P. FAIRAND and A. H. CLAUER: J. Appl. Phys., 50 (1979), p. 1497
 - 37) B. P. FAIRAND, B. A. WILCOX, J. W. GALLAGHER, and D. N. WILLIAMS: J. Appl. Phys., 43 (1972), p. 3893
 - 38) A. H. CLAUER, B. P. FAIRAND, and B. A. WILCOX: Metall. Trans., 8A (1977), p. 119
 - 39) A. H. CLAUER, B. P. FAIRAND, and B. A. WILCOX: Metall. Trans., 8A (1977), p. 1871
 - 40) F. BRAILSFORD and Z. H. M. ABU-EID: Proc. IEE, 110 (1963), p. 110
 - 41) D. BROWN, C. HOLT, and J. E. THOMPSON: Proc. IEE, 112 (1965), p. 183
 - 42) T. YAMAMOTO and T. NOZAWA: J. Appl. Phys., 41 (1970), p. 2981
 - 43) T. YAMAMOTO, S. TAGUCHI, A. SAKAKURA, and T. NOZAWA: IEEE Trans. Magne., MAG-8 (1972), p. 677
 - 44) 井内 徹, 山口重裕, 市山 正, 中村元治, 石元忠志, 黒木克郎: 鉄と鋼, 67 (1981), S 1203
T. IUCHI, S. YAMAGUCHI, T. ICHIYAMA, M. NAKAMURA, T. ISHIMOTO, and K. KUROKI: J. Appl. Phys., 53 (1982), p. 2410
 - 45) 中村元治, 広瀬喜久司, 菅 洋三, 井内 徹, 山口重裕, 市山 正: 鉄と鋼, 68 (1982), S 548

コ ラ ム

鉄鋼技術を支える論文と講演発表件数の推移

図は昭和 54 年 1 月～58 年 2 月までの約 4 年間に
おける論文投稿件数と講演大会での発表件数の推移を
示す。

まず、講演発表件数 (申込期限から春季大会を 1
月, 秋季大会を 7 月に対応させた) は年を追って増加
し、特に地方で開催される秋季大会での件数は多く、
春低秋高型で推移している。昭和 57 年秋季の札幌大
会では実に、844 件の多きを数えた。

データが明らかになっている昭和 55 年秋の大会以
降について、分野別の推移 (ポスターセッションと討
論会は除く) をみると (図の最上部)、製鉄は春低秋
高型の傾向を示しつつ着実に増加している。製鋼は大
きな波形変動を示してはほぼ横ばいである。加工とシ
ステムを合わせた発表件数は昭和 57 年春季でやや落ち
込んだものの約 2.5 年間に 1 回当たり 100 件と著し
い増加を示している。材料+分析は製鉄と同様に春低
秋高型の変動を示すものの全体としては減少傾向を示
している。

これら推移の結果として現れると予想される「鉄と
鋼」への月間投稿件数は昭和 56 年から 57 年前半に
やや高レベルにあるものの、全体としては 13~14 件
/月を中心に変動しており、講演発表件数の推移との
対応は認められない。

((株)神戸製鋼所中央研究所 稲葉晋一)

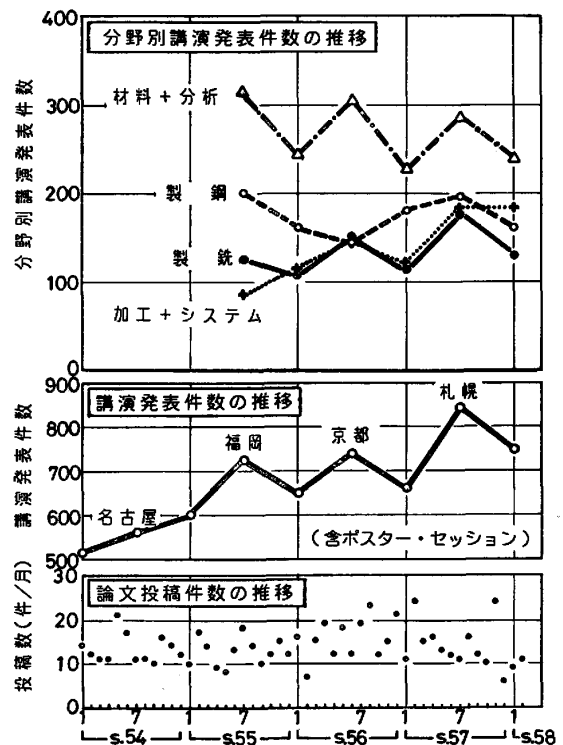


図 月間の論文投稿件数と講演大会での発表件数の
推移 (日本鉄鋼協会編集課資料より)